

笹川 ささがわ

尾波における往還は、常に笹川(ささがわ)と共にある。

笹川は、中尾波(なかおなみ)の山中を源とし、角折・鬼村を貫き、静間町の笹、弓辺(ゆんべ)を経て、仮屋(かりや)で静間川(しずまがわ)と合流する。

静間川は大田市を流れる最長の川で、現在は静間町の平(ひら)と新田(しんでん)の間で、海にそそいでいる。しかしかつては、やや東の静間町和江

大屋一大森間の古道

⑥ 往還を行く おつかん

三井淳



笹川

(わえ)、ある五(ご)余りの堤防を築いた鳥井町八幡原(やわたばら)方面へも下っていて、絶えず河口を交えた。つまりは暴れ川だったので、十七世紀末の元禄の頃、前原源三郎といふ有徳人(うとくじん)が、二百五十間(四十間川とは、古代大田西に瓜(うり)ふたつ)の流れた(大田の名残なのであり、笹川は、その最深部に当る)。

編「ふるさと読本」平成十七年)。笹川沿いに延々と続く湿地帯は、明らかに人の手なる狭田(さだ)の痕跡であり、これは往還五十猛側の、嘉庭(かにわ)観音谷(くわんおんや)の状況である。かつてはこの辺りからも砂鉄が採られ、たたら製鉄が行われていた節がある。観音谷が如きたたら地蔵が、埋れているやもしれない。

(五十猛歴史研究会 会員 みつい・あつし)

日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「おす木曜日」は内藤博之さんの「ガウデ